

吟子の嫁入り『赤岩の渡舟』

千代田町に生家の長屋門が移築されている日本初の女性医師、荻野吟子を描く映画「一粒の麦 荻野吟子の生涯」の撮影が 20 日、千代田町の利根川左岸の赤岩渡船場で行われた。渡船場下流には荒縄で結んだ撮影用の船着き場が設けられた。吟子役の若村麻由美さん、吟子の生涯の友、松本萩江役の賀来千香子さんや母親役、磯村みどりさんらが現場入りすると、エキストラ出演の町民らの歓声が上がった。吟子が花嫁姿で高瀬舟に乗って嫁ぐシーンではエキストラ役から「きれい」「かわいい」と声が掛けられた。船頭役で出演した椎名英雄さん（72）＝伊勢崎市＝は「昔ながらの竹ざおで舟を操れるということで出演することになった。朝 7 時に着き、準備は万端」と撮影に取り組んだ。利根川のシーンに続き、一行は 21 日に長屋門のある光恩寺でも撮影された。



最初の結婚

慶応 4 年（1868）、吟子が 17 歳になる年に、埼玉郡上川上村（現熊谷市上川上）の名主稲村家の長男、に嫁ぐことになりました。稲村家は、古河藩領であった上川上村の運営を担った家で、この地域では有数の豪農でした。吟子が嫁いだ当時、古河藩士を父に持ち、日本を代表する女流南画家・奥原晴湖が、戊辰戦争の難を逃れるため、稲村家に仮寓していました。晴湖との出会いは、吟子の人生に大きな影響を与えたようで、吟子は上京時に、晴湖のように男装したとも伝えられます。吟子と貫一郎の結婚は、長くは続きませんでした。吟子が病気にかかり、実家での療養を余儀なくされたのです。そして、明治 3 年（1870）、協議離婚となりました。貫一郎は、その後も吟子への援助を続けたといわれています。



坂田医院旧診療所

昭和6年、医師の坂田康太郎氏は新たな診療所を妻沼下町に開設。鉄筋コンクリート構造の平屋建て。玄関には外側へ突き出したポーチが造られ、外壁を覆うスクラッチタイル貼りが建物の顔。内装は診察室などその面影が残っている。部屋の上部は直線的なデザインで、温和な美が感じられ、アールデコ調の照明が印象的です。今や映画やドラマの撮影場所として注目を集めています。時は、明治3年(1870)、吟子は病気で協議離婚(19歳)、師の松本萬年の紹介で大学東校(現東京大学医学部)の付属病院に入院することになりました。生死をさまようほどの病状となり、約2年間の入院を余儀なくされました。やや回復し、同じ女性患者を励ます際、男性の医師に診察される経験に羞恥と屈辱を覚えることに共感し、これが嫌で受診せず、命を落とす女性さえいることを嘆きます。女医の必要性を痛感し、吟子自身が女医となる決意をしたのでした。



明治3年(1870) 吟子は病気で協議離婚(19歳)
大学東校(現東京大学医学部)の付属病院に入院することになりました
生死をさまようほどの病状となり、約2年間の入院を余儀なくされました
男性の医師に診察される経験に羞恥と屈辱を覚え、女医の必要性を痛感し
吟子自身が女医となる決意をしたのでした
日本初の女性医師を描く映画「一粒の麦」ロケシーン

Copyright (C) 2019 oginoginko All Rights Reserved.



吟子のふるさと俵瀬。



若き吟子が経験した利根川。寒冷な冬の利根川と吟子の熱き生命が密着に関わり合う。冬には赤城山からの寒冷な“赤城おろし”が吹き付ける。夏は豪雨による洪水にさいなまれる“水場の地”であったこと。このような自然の特徴が吟子の生命と強い精神力を育てたのでしょ。利根の恵みです。

吟子と荻江「嫁に行き、子供を産むだけがおんなの仕事ではないわよ。学問をして身を立てるという方法もあるんだから! 時代はどんどん動いているのよ。こんな病気早くなおして、もっと学問を身につけて前に進みましょう。あなたはまだ若いよ。これからよ」と呼びかけるシーン。



吟子が学んだ『行余書院と両宜塾』

吟子は、幼いころから聡明で、勉強好きであったといわれています。俵瀬村の隣、和田村（現熊谷市和田）の大龍寺には、北条察源が“行余書院”という寺子屋を開設しており、吟子が学んだ可能性があります。そして、明治5年(1872)、吟子は幕末の著名な儒学者・寺門静軒が妻沼村（現熊谷市妻沼）で開塾した“両宜塾”に入門しています。静軒の後を継いだ松本万年の教えを受けました。松本万年は、静軒に漢学を学び、医業も修めました。また、吟子をはじめ、深谷宿（現深谷市）出身の公許女医 2号・生沢クノなどの師であり、女子教育に力を注いだ人物でした。両宜塾では万年の長女荻江も教えていましたが、吟子と荻江は深く親交を結び、義姉妹の契りを交わしたと伝えられます。



『歓喜院本坊本殿』



妻沼には国宝「歓喜院聖天堂」をはじめ多くの文化財や建築物があり、時代を超えて継承されてきた歴史や独特の文化があります。そうした妻沼の歴史の中で、俵瀬の地に生まれた「荻野吟子」は大きい存在です。彼女の人生が利根川を前にした妻沼の地から始まり、その時代の苦難に奔放され続け、それでも決してあきらめずに“日本初の女医”となりました。このことは熊谷の誇りとして広く語り続けていくことでしょう。



メヌマポマードでお馴染みの『井田記念館』



昭和27年井田氏の居宅を移築し、井田記念館となっています。翌、昭和28年に初の民間テレビ局（現・日本テレビ）が開局すると、民放テレビコマーシャルとしてメヌマポマード2番目に放送されました。セイコーが第1号。そして平成31年4月、この記念館で日本初の女性医師を描く映画「一粒の麦」のロケがありました。時は、明治6(1873)父綾三郎が亡くなると、さらに学問を修めるため吟子は22歳で上京します。まず、国学者であり、かつ皇漢医である井上頼圀の私塾神習舎に入ります。頼圀は後に国学の大家となる人物です。この私塾での熱意が魅力的。井上頼圀門下吟子の同級生たちが、ここ井田記念館に集まりました。



大正時代の洋風建築がよみがえる『深商記念館』

深商記念館は、大正11年(1922)に建設された、フレンチ・ルネサンス様式で、県内で唯一、完全なかたちで残る大正期の木造校舎です。町立深谷商業学校(当時)の設立には、地元の有力者であった渋沢栄一や大谷藤豊たちが尽力し、1921年に創立され、校舎は翌年に完成しました。当時の深谷町民にとって学校設立は悲願であり、鉄筋4階建ての新校舎が建設される1965年まで使われていました。1981年の創立60周年を機に「記念館」として、各種資料の展示室や作法室などとして利用されてきました。

時は、明治16年、吟子は石黒忠恵に助けを求めます。石黒は内務省衛生局長の長与専斎に会うための紹介状を吟子に渡しますが、このとき、井上頼圀に頼んで、日本の古代にも女医がいた文献“令義解”があることを資料にし、紹介状に添えたともいわれています。吟子はようやく女性の受験が認められたのでした。映画「一粒の麦 荻野吟子の生涯」をロケーション。

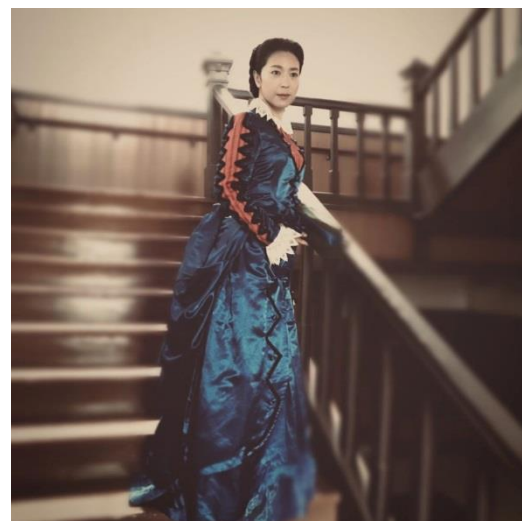




記念館は昭和3年(1928)に竣工された昭和初期を代表する教育建造物。過ぎし明治12年(1879)、医学校は女人禁制であったが、好寿院に入り医学を学ぶことになった荻野吟子。吟子を一番苦しめたのは、男装して男だけの学校に乗り込んだこと。そのため、酷い嫌がらせを受け精神的にも肉体的にも苦しむ日々を送ったこと。しかし、吟子の医者になりたいという気持ちは強く、3年目に卒業している、吟子31歳。写真は好寿院イメージ＝記念館「一粒の麦・映画の一部」



埼玉県熊谷市出身の日本女医第一号の荻野吟子女史の映画化にともない、山田火砂子監督が吟子女史生家の長屋門が移築されている群馬県千代田町を訪問されました。熊谷市の利根川を挟んだ対岸の群馬県千代田町は今日も両地域住民の親戚関係も多く、昔から繋がりの強い地域です。吟子女史生家長屋門が移築されている光恩寺を訪問し、高橋千代田町長や長柄住職から説明を受け、懇談をしました。その後、太田市の常磐学園にて吟子女史直筆の手紙などを所蔵されている常見理事長から、山田監督とご一緒に様々な資料をもとにお話をうかがいました。現在この資料の読解が進められており、この映画制作にあたっては新しい吟子女史の人間像が反映されることになりそうです。



思い出の俵瀬

吟子は医術開業試験に悩んでいる時、実家である俵瀬から一通の手紙が届く。内容は母“かよの危篤”の知らせであった。吟子は、急いで実家に戻るが母の死に間に合うことができなかった。吟子は母の死を受けて自分の道は本当にこれで良かったのだろうか、誤ったのではないだろうかと考え込むが、医者になるという強い思いは変わらず、もう一度自分自身に強く言い聞かせるのであった。そして、明治 17 年女性の開業医受験を許す旨の布達が正式になされたのであった。吟子は、毎日一生懸命勉強に励み、明治 18 年(1885)政府公許の女医第一号となった。



明治 18 年「母さまが！危篤」
亡きお母様と子供のころの俵瀬を偲ぶ吟子
「おかあさんの目から、なみだがひとすじ流れおちました
それは 吟子が医者になったことを祝福してくれているように思えました

Copyright (C) 2019 oginoginko All Rights Reserved.



吟子のふるさと俵瀬

明治 24 年(1891)年に起きた岐阜県を中心とする濃尾大地震で女子の孤児を保護するために立ち上がった石井亮一に賛同し、荻野医院を子供たちのために開放、吟子は孤児たちの世話をしました。写真は孤児たちを志方が引き取り、吟子が開業した東京の医院まで連れ帰るシーン。日本初の女性医師描く映画「一粒の麦」俵瀬ロケより。



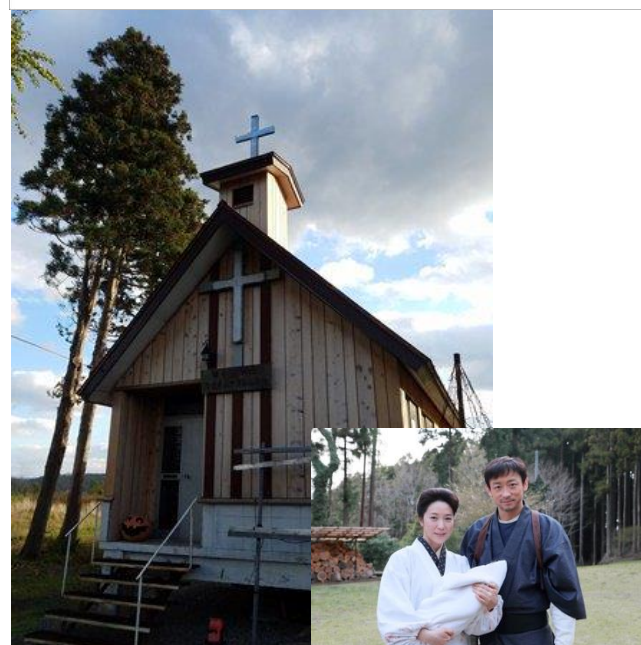
明治 24 年(1891)年に起きた岐阜県を中心とする濃尾大地震では
女子の孤児を保護するために立ち上がった石井亮一に賛同し
荻野医院を子供たちのために開放、自らも孤児たちの世話をしました
写真は孤児たちを志方が引き取り吟子が開業した東京の医院まで連れ帰るシーン
日本初の女性医師描く映画「一粒の麦」ロケ

Copyright (C) 2019 oginoginko All Rights Reserved.



北海道久遠郡 瀬棚(せたな)町

明治 36 年(1903)、志方之善は京都の同志社に再入学するため北海道を離れました。吟子は、札幌での開業も目指していたようですが、実現したかは分かりません。明治 37 年(1904) 大病を患い熊谷の 9 つ年上の姉友子のもとで療養しています。一時回復するものの再び病に伏せます。明治 38 年(1905)、伝導のため之善が北海道に戻り、さらに瀬棚に帰ると、吟子も無理を押して瀬棚に戻ります。しかし、今度は志方が病を患い、同年 9 月 23 日会津町の自宅で亡くなりました。享年 41 歳、吟子が 54 歳のときでした。之善の墓はインマヌエルに建てられました。



荻野吟子生誕の地と荻野吟子記念館

荻野吟子は埼玉ゆかりの三偉人のひとりです。たゆまぬ努力の結果、日本で初めて公許登録女医となった荻野吟子、自らの障害を乗り越え、群書類従の編纂などを行った塙保己一、企業の育成や社会事業に尽力し、近代日本経済の礎を築いた渋沢栄一。

荻野吟子（道の駅めぬまの銅像） 吟子は生前「人その友の為に、己の命をすつるは、此れより大なる愛はなし」という言葉を大切にして行動し、女医の門戸を開き、また女性の地位向上に貢献しました。こうした吟子の功績に対し、昭和 59 年(1984)年、公許女医誕生 100 年記念式典が開催され、(社)日本女医会は、社会貢献などの功績や僻遠の地での医療に従事した女医に贈る賞として、「荻野吟子賞」を制定しました。また、故郷の埼玉県では吟子を埼玉県 3 大偉人の 1 人としてその功績を称えています。平成 20 年 3 月 20 日(2008)、吟子は星になりました。その星は、熊谷市の天文同好会の方が発見した 小惑星で、火星と木星の間の軌道を回っています。星の名前を付けるのに当たり、熊谷市が市町村合併後の新しい市に相応しい名前を募集したところ、多数の応募の中から「荻野吟子」が選ばれたのです。夜空を見上げると、皆さんも吟子と出会えるかもしれません。

